

ホツマツタエ講座
特別講座

2014_11_15～17 付
2014_11_28_深雪降追加
2014_12_ 7 最終見直済
2014_12_18 八月初日生る初穂
2014_12_19 旧・新暦、誤植訂正
2015_ 7_ 5 在位年数の誤植訂正
2015_10_ 9 旧→短暦に誤植訂正
2015_11_ 25 2015 年不知火追加

(仮)27鈴頃～のスス暦は、2倍化暦で誤植された古代太陽暦であった。

その史料を基に、長暦(暦)の太陰太陽暦の(現)アスス暦が編纂されていた。 !!

ホツマツタエ研究家 吉田六雄

まえがき

不知火の発生は、毎年、旧暦の八朔(旧暦8月1日)頃になるようです。今年(2014年)の旧暦8月1日は、西暦(太陽暦)で8月25日でした。この不知火が古代日本に初見されるのは、景行天皇18年の条の(アスス暦)5月初日頃に、「人の火ならず 知らぬ火の(ホツマツタエの記述)」、また「茲知非人火。故名其国曰火国。(日本書紀の記述)」との記述が残っていました。だが、自然現象である「不知火」の発生月に、旧暦8月1日と(アスス暦)5月初日頃の2つの発生月がある筈がなく、この場合は、ホツマツタエ、日本書紀の(アスス暦、日本書紀暦)5月初日頃の記述が「おかしい」と思われます。

結論を先に述べますと、この可笑しげな不知火の発生月の記述には、2倍化暦と云う「からくり」があり、日本書紀の研究者の間では有名な長暦(暦)と云われる紀年(日本書記の長暦を指す言葉)の現象が悪さをしておりました。今回、その「からくり」を明らかにするため、ホツマツタエの「スス暦」、「アスス暦」の解説方法を簡単に説明しながら、(アスス暦)5月初日頃→近似日の短暦の9月1日(注一)に換算するところを説明したいと思います。

(注一)不知火の発生月のアスス暦の8月朔と、短暦の9月1日の計算の違い(考察)

(現)アスス暦は閏月の表示はありませんが、(現)アスス暦を確認した時、ある年の月日の一部に日のエトが30エト違うことがありました。この現象は、太陰太陽暦の特有の現象です。一般的に太陰太陽暦には、太陽暦との差を補正のため、閏月を19年間で7回も挿入しますが、(現)アスス暦では、どの年月に挿入されたか未確認です。そのため、今回、長暦(暦)→短暦への変換には、太陽暦の12ヶ月を使用したため、太陰太陽暦(約3年間で1と月の補正)と太陽暦との月の違いが計算月に、「月の違い」となって表示されると思っております。そのため、計算の評価は、ホツマツタエの記述月に対し、±1と月までを近似月としました。今後、計

算月については問題点も把握しておりますので、引き続き研究することにしたと思います。

なお、古代の周辺の国の暦の記述より、2倍暦を提唱された講演議事録を読みましたが、その2倍暦とは違い、この当論文は、ホツマツタエの記述を暦の記述を数値化して、その計算式を基に、必然的に2倍化暦→1倍化暦の計算式を構築し、現在(2014年)の不知火の発生月を近似月で求めました。現在、垂仁天皇～景行天皇の御世の4件の自然現象について、近似月日ではありますが、再現性の方向は間違っていないことを確認しております。なお、最終的には、アスス暦、日本書紀暦の紀年の欠点がクローズアップすることになりましたが、最後まで、ご一読して戴けると幸甚です。

I、長暦(暦)だったスス暦、(現)アスス暦

平成6年3月にホツマツタエと出会い、今年で約20年になりました。その間の主な研究は、ホツマツタエ暦(スス暦、アスス暦)になります。約20年の研究で判明したのですが、(1)スス暦は、鈴・枝・穂・エト・大きい暦数字・月・日・季節が基本ですが、近代太陽暦で解読できたことでした。(2)アスス暦は、穂・月・日・エト・季節が基本ですが、暦法としては太陰太陽暦で解読できたことでした。また月暦の2つの1年の日数(約385日、約265日)も隠れておりました。更に2つの月暦の組み合わせにより解読した結果、近代太陽暦の1年365. 2422日も隠れておりました。

(注二)(現)アスス暦とは、

ホツマツタエに記述のアスス暦が、太陰太陽暦の長暦(暦)であることが判明して来たため、記述以前の(本来)アスス暦と区別するため、識別名を設けました。

【想定されるホツマ暦の変遷】

	(消滅)	(消滅)→今回、再現
スス暦(1日16穂)	→ (短暦) スス暦(1日8穂)	→ (本来)アスス暦
(古代太陽暦)	↓	(太陽暦に変換)
	→ (長暦) スス暦(1日16穂)	→ (現) アスス暦
	(誤植で存続)	(太陰太陽暦に改暦)

1、スス暦

(1)1日の長さを、スス暦の穂で数える

もう少し具体的に説明しますと、(1)スス暦においては1日の長さを、スス暦の穂で数えており、その数え穂に「1日16穂」と「1日8穂」がありました。更に(仮)27鈴頃に、「1日16穂」から「1日8穂」に変更された記述がありました。だが、このことはあくまでもスス暦の記述を発見しただけで、計算で再現できるか否かは、掴めておりませんでした。そこで、記述に準じて

「月日」の再現性を検証してみました。計算方法としては、鈴・枝・穂で計算された大きい暦数字を「1日の長さ」で割り算し、更に近代太陽暦の1年365. 2422日で割り算し、近代太陽暦の年月日に変換して見ました。

その結果、(1)スス暦の初め～(仮)27鈴までは、「1日8穂」より「1日16穂」で計算した「月日」の方の再現率が高くなっていました。(2)反対に(仮)27鈴～50鈴までは、「1日16穂」より「1日8穂」の方が「月日」の正解率が高くなっていました。このことより、1日の長さの「数え穂」である「1日16穂」→「1日8穂」への変更時期は、スス暦の記述の通り(仮)27鈴頃より変更されたことが確認できました。またスス暦の1日は「数え穂」で運用されていたことが確定された瞬間でした。

スス暦の運用、1日の数え穂の検証(まとめ)		【判定】 ○印:運用、×印:未運用			
		2ヶ月以内	2ヶ月以内		
		1日16穂	1日8穂	1日16穂	1日8穂
鈴暦の年代	全件数	件数	件数	評価結果	評価結果
21鈴～26鈴999枝59穂	6	4	0	○	×
27鈴～50鈴	5	1	4	×	○

(2)スス暦と在位年数

スス暦が、1日の穂で数えていたことが判明したため、その延長として、スス暦より近代太陽暦に変換したスス暦の年表を作成して見ました。年表の上に、スス暦のカミ(神)であるアマカミ(天神)、アマキミ(天君)、オオヤマスミ(大山祇)、モノヌシ(大物主)の出現年代を記入し、在位年数を計算して見ました。その結果、判明したことは、(仮)27鈴の前の在位年数に対し、後の在位年数が極端に長い(長暦)と云うことが判明しました。

例として取り上げますと、オオヤミスミ系のミシマミゾクイの約70年間、モノヌシ系のミホヒコ約115年間、カンタチ約108間、ワニヒコ約131年間は異常に長いことがわかります。それに対し、同じオオヤミスミ系のサクラウチ約34～35(誤植訂正分)年間、モノヌシ系でもクシキネ、クシヒコは、約34年間、約32年間と現在人に近いことがわかります。なお、オオヤマスミ系のオオヤマカグスミ、オオヤマスミ、カクヤマツミは、約14年～約62年間で意見が分かれるところです。

2015_7_5 在位年数の誤植訂正

次頁のオオヤマスミの在位年数表、モノヌシの在位年数表の(本来)(現)の年について、誤植(元資料からの転機ミス)が見つかりましたので訂正しました。

オオヤマスミの在位年数表

記入方法:(本来)、(現):在位年数を表す

代	イミナ、官名	鈴暦の期間	(本来)	(現)
6代	サクラウチ	21～25鈴	34	35
アエよりヤエ	の 中五日 (1日	八穂)	27鈴～	
7代	オオヤマカグスミ	25～29鈴	15	14
8代	オオヤマスミ	29～30鈴	20	36
9代	カクヤマツミ	30～36鈴	31	62
10代	ミシマミゾクイ	36～42鈴	35	70
平均			27	43

モノヌシの在位年数表

記入方法:(本来)、(現):在位年数を表す

代	イミナ	鈴暦の期間	(本来)	(現)
先代	ハナキネ	21～25鈴	?	?
初代	クシキネ	21～25鈴	33	34
アエより	ヤエの 中五	日 (1日八穂)	27鈴～	
2代	クシヒコ	25～29鈴	27	32
3代	ミホヒコ	26～36鈴	57	115
4代	カンタチ	36～49鈴	55	108
5代	フキネ	50鈴	0 (不明)	0 (不明)
6代	ワニヒコ	50鈴～天鈴170穂	74	131
平均			49	84

(注三) (現)、(本来):在位年数とは、

(現)とは、大きい暦数字を「1日16日」で割り算し、求めた在位年数を云う。

(本来)とは、(現)の大きい暦数字を「1日32日」で割り算し、求めた在位年数を云う。

(注四) 5代フキネは、モノヌシに就任日のみの記述のため、年数の特定不可でした。

2、(現)アスス暦

スス暦の御世→アスス暦の御世に生きた人がいました。その人の名は、6代モノヌシのワニヒコです。在位期間は、スス暦の50鈴～アスス暦の170穂までであり、在位年数は約131年間になります。このことから、アスス暦でも異常な在位年数になっていることがわかってきます。このように、スス暦の御世において、在位年数が異常に長かったが、更に、アスス暦の御世においても、スメラギ(天皇)の在位年数が異常に長い(長暦)ことが継続されていたようです。このことは、スス暦とアスス暦の元の暦は同じ暦法であったと云えます。

だが、違うところは、(現)アスス暦を解読して見ると、長暦(暦)の上に、太陰太陽暦になっていたことです。そのことを証明するように、閏月も確認され、また、12代までのスメラギ(天皇)の内、8人が異常であり、神武天皇は76年間、孝安天皇83年間、孝靈天皇102年間、孝元天皇76年間、開化天皇56年間、崇神天皇61年間、垂仁天皇68年間、景行天皇99年間の在位年数になっておりました。

Ⅱ、長暦(暦)に改悪されていたスス暦、(現)アスス暦の原因

重複の説明になりますが、スス暦での「月日」の再現性調査のため、「1日の長さ」である「1日16穂」と「1日8穂」で検証して見ました。その結果、1鈴～(仮)27鈴までは、「1日16穂」で計算されており、(仮)27鈴～50鈴は、「1日8穂」で計算されておりました。だが、アマカミ(天神)、アマキミ(天君)、オオヤマスミ(大山祇)、モノヌシ(大物主)、スメラギ(天皇)の在位期間は、1鈴～(仮)27鈴までは、「約32年～34年間の現在人並み」に対し、(仮)27鈴～50鈴は、「約25年～約131年間と異常に長く」なっておりました。

このように、「1日の長さ」と「在位期間」は、(仮)27鈴頃を境に反比例になっておりました。この反比例になった原因を推定しますと、スス暦の(仮)27鈴頃に「1日16穂」→「1日8穂」が改暦されておりました。それにも関わらず、従来道り「1日16穂」で記録されていたと思われます。その後、その間違えられた史料を使用して、次の暦である(現)アスス暦が編纂されたため、「1日の長さ」が、「長大化(長暦)」した「2倍化暦」に改悪されているに至ったと思われます。更に不幸なことは(現)アスス暦を編纂する際に、近代太陰太陽暦の暦に改訂されるに至ったため、後世の人がチェックしても、暦法としては問題なく良好であり、長暦(暦)に至った原因さえも不明となり、ただ、ただ、長暦(暦)だけが残されたことでした。

Ⅲ、古代に存在した(本来)アスス暦の太陽暦の検証

1、(現)アスス暦の長暦(暦)が、短暦(注五)に戻せない理由

(現)アスス暦は太陰太陽暦であり、長暦(暦)であることを先に説明しました。その長暦(暦)の原因は、(仮)27鈴～50鈴までの期間において、「1日8穂」で計算するところを、「1日16穂」で計算していたための誤植でした。そのため「長暦(暦)」になっておりました。また、「長暦(暦)」を短暦に是正する方法としては、現在「1日16穂」で計算されているため、元の「1日8穂」に戻すべく、「1日32穂」で計算し直すと元に戻るようになります。

だが、(現)アスス暦は太陰太陽暦と説明を続けてきましたが、一つ困ったことがあります。現在、(現)アスス暦を太陰太陽暦暦法での解説式は完成しておりません。その理由ですが、アスス暦当時の太陽と月の動きが把握されてないため、暦法プログラムが作成できないことに起因しております。

2、(現)アスス暦を太陽暦の長暦(暦)と見做した暦について、短暦(注五)への戻す方法

(現)アスス暦を一次方程式で解説して行きますと、月暦が出現します。それも、月暦には、2つの1年の日数の暦が解説されました。その解説時には、21個の暦日をデータとして採用しましたが、その内の7個は、記述の月名を入力しても、記述の日エトと計算の日エトが一致せず、30エト違っておりました。そこで、更に±1と月で入力しますと、記述の日エトと計算の日エトがほぼ一致しました。この現象は、閏月の現象です。(現)アスス暦を一個の計算式では、太陰太陽暦の閏月の発生を求めることができませんでしたが、±1と月とすることで、閏月を確認できるため、月暦の計算でも太陰太陽暦が確認できたと判断し作業を進めました。

更に、その延長線上において、2つの月暦の1年の日数(約385日、約265日)を組み合わせた結果、現在の太陽暦の1年の日数の約365. 2422日が隠れていることを掴むことができました。このことで、自前の太陽暦の1年約365. 2422日が把握できましたので、太陰太陽暦での長暦(暦)→短暦に戻すことを諦め、その代わりに太陽暦において、長暦(暦)の(仮)アスス暦→短暦の(仮)アスス暦に戻すことにチャレンジしました。

(注五)短暦とは、

長暦(暦)に対する反語で短暦と命名しました。紙面上での短暦への変換は、アスス暦を精査しますと太陽暦が隠れておりましたので、この太陽暦を長暦(□印)と見なしました。そして、見なした暦について、計算により短縮した暦を短暦(△印)として表現してあります。詳細は、(注六)を参照して下さい。

(注六)本誌の長暦(暦)と短暦の暦法

長暦(暦)とは、(太陰太陽暦+2倍化暦)を指す。

短暦(暦)とは、(太陽暦+1倍化暦)を指す。

表示 ー印:ホツマに未記述、◎印:解説で判明、□△印:是正に使用、×印:想定なし

	スス暦	スス暦	アスス暦	アスス暦の 太陰太陽暦	アスス暦の 太陽暦
長暦(暦)	ー	◎	ー	◎	□
短暦	ー	◎	ー	×	△

(注七)なお、日本書紀暦日原典に掲載されておりますシナ暦の儀鳳暦(728年シナで採用された暦)の計算式では、閏月の発生を確認し、太陰太陽暦を確認しております。

3、太陽暦と見なした(仮)アスス暦を短暦(仮)アスス暦に変換する方法

長暦(暦)の誤植原因は、「1日の数え穂」を、「1日8穂」にすべきところを、「1日16穂」で計算されていたため、長暦(暦)の(現)アスス暦の年月日の暦日を一旦、スス暦の大きい暦数字に戻すことにします。その後、太陽暦になるように計算して行きます。具体的には、順を追って、変換方法を説明して見たいと思います。

(1)(現)アスス暦の記述の年月日より、太陽暦の経過日数を求め、更に「1日16穂」を掛け算し、スス暦として、長暦(暦)の大きい暦数字に変換し直します。

(2)次に、その大きい暦数字を「1日32穂」で割り算し、スス暦として、短暦の大きい暦数字に置き換えます。更に1年約365.2422日で割り算し、次々に、年、月、日を計算して行きます。計算された月日は、短暦であるアスス暦(太陽暦)の暦日になります。

(3)なお、具体的に運用として、(現)アスス暦の各年月日を長暦(暦)から短暦に変換する「簡便法」を、下記の「長暦(暦)→短暦の変換表」に掲示しました。

「簡便法」の使用例について、説明しますと、

例①表左列より、アスス58(偶数)年1月1日を選択し、あと右側に移動させ、右列の月日を読みますと、その数字が、短暦の7月1日になります。

例②表左列より、アスス806(偶数)年5月1日を選択し、あと右側に移動させ、右列の月日を読みますと、その数字が、短暦の9月1日になります。

長暦(暦) → 短暦へ変換する簡便表

長暦(暦)_ (現)アスス暦(変換前)				短暦(暦)_太陽暦(変換後)			
年		月	日	年		月	日
奇数年	春	1	1	任意年	春	1	1
		2	1				16
		3	1			2	1
	夏	4	1				16
		5	1			3	1
		6	1				16
	秋	7	1		夏	4	1
		8	1				16
		9	1			5	1
	冬	10	1				16
		11	1			6	1
		12	31				31
偶数年	春	1	1		秋	7	1
		2	1				16
		3	1			8	1
	夏	4	1				16
		5	1			9	1
		6	1				16
	秋	7	1		冬	10	1
		8	1				16
		9	1			11	1
	冬	10	1				16
		11	1			12	1
		12	30				31

Ⅳ、スス暦より作られた(本来)のアスス暦は古代太陽暦だったが、その後 (現)アスス暦に 編纂時に長暦(暦)に改悪されていた !!

1、(現)アスス暦の太陰太陽暦としての問題点

これまで、繰り返し(現)アスス暦は、太陰太陽暦であったと説明して来ましたが、ホツマツタエのアスス暦の暦日の記述を一見すると、何処に問題があるのか不明です。そのため、皆さんより質問があるように感じます。

(1)想定質問(案)

ホツマツタエの(現)アスス暦であるタケヒト(神武天皇)以降の記述を見ますと、「アススの年、月、日の記述もあり、季節の春夏秋冬もあり、七草、五月雨、初棚機、ゾロ実り、氷雨降りも記載しており、何の疑いもないと思われますが、暦として、何処に問題があるでしょうか」

(2)春夏秋冬の季節の記入より長暦(暦)の可否の確認

今回は、月日、季節の明確なアスス暦について、丹念に調べて見たのが、下記の「アスス暦の季節、暦日抜粋表」です。この表を見ますと、月名が記述されているが、春夏秋冬の記述は、249件中34件であり、記述率は約13%になるようです。そして、この季節の言葉からは、正誤を検証する方法は見つからないようです。(比較対象の事象が発見できないため)

(抜粋)アスス暦、月名と春夏秋冬の言葉(単語)

月名の記述	ホツマの記述	件数	率
1～3月	月・春	18	7%
	月のみ	62	25%
4～6月	月・夏	3	1%
	月のみ	25	10%
7～9月	月・秋	5	2%
	月のみ	49	20%
10～12月	月・冬	6	2%
	月のみ	41	17%
	月・季節なし	40	16%
合計		249	100%

(3)季節を想像させる言葉(単語)の記述より長暦(暦)の可否の確認

季節を想像させる言葉をホツマツタエより検索しますと、下表の13件が見出されました。この中で、1年に1回、または、現在でも確認できる言葉に絞って、長暦(暦)の可否を検証して見ようと思います。特定できる言葉としては、①七草、②ゾロ実り、③河内狭山は 水足らず、

④人の火ならず 知らぬ火の、例を挙げられます。その中でも、一般的には見聞きしない言葉の③河内狭山は 水足らず、④人の火ならず 知らぬ火の、を優先し検証して見ようと思います。

(抜粋)アスス暦、季季節を想像させる言葉(単語)

季節	アスス暦の年代	アスス暦の記述	年1回	現認
	・年代特定できず	つむじ風	×	×
	・年代特定できず	氷雨降り	×	○
	(58 年)年サナト 初日サヤエに	古事記し奉る。①七草ミソも・・行われ	○	○
	(60 年)3穂の	サミダレ 四十日降り (月日:不明)	×	×
	・年代特定できず	サミダレ 六十日降り 早苗みもち	×	×
夏	(512 年)9穂の夏	雨四十日降り (月日:不明)	×	×
	(627、628 年?)メ(10)月初日に	②ゾロ実り	○	○
	(682 年)62 年天フミ(7)月	③河内狭山は 水足らず	○	○優先
	(695 年)7穂フ(7)月 初日	初棚機(七夕)	○	×
	(714 年)(ナ・9 月)17日の夜	ゾロ析り 雨風の節	×	×
	(752 年)64 年	五月雨四十日 降り続き(月日:不明)	×	×
	(806 年)(18 年)サ(5)月初日	④人の火ならず 知らぬ火の	○	○優先
	(829)ム(睦)月スエ八日	⑤ミュキ(深雪)降り追加 2014_11_28	○	○追加
春	(833、834 年?)四十六穂の春	①七草の (月日:不明)	○	○

(注八)表中の()内の数値などは、筆者が後述した。

(4)自然現象の発生月と違う、(現)アスス暦の記述月

この③河内狭山は 水足らず、④人の火ならず 知らぬ火の、言葉について、上表を良く眺めて見ますと、何処にも落ち度があるとは思われないようです。だが、詳細に見て行きますと、現在の自然現象の発生月と違う、(現)アスス暦の記述月になっていることに気付きます。

(抜粋)アスス暦の記述

(682 年)62年天フミ(7)月	③河内狭山は 水足らず	○	○優先
(806 年)(18 年)サ(5)月初日	④人の火ならず 知らぬ火の	○	○優先

③河内狭山は 水足らず

アスス暦682年、崇神天皇の御世62年の7月に、天皇より「河内狭山は 水足らず・・・池掘らん」との勅があったとの記述です。その河内狭山の所在地を搜しますと、現在の大阪府大阪狭山市のことになるようです。そこで、大阪狭山市の年間降水量(大阪府で代表)を調べますと、旧暦(明治5年以前の暦を云う)の7月(太陽暦8月)、10月(太陽暦11月)～2月(太陽暦3月)は、降水量が少ないようです。そのため、大阪狭山市には、沢山の溜め池が存在し

ます。そうしますと、「河内狭山は 水足らず……池 掘らん」が記述されていた月は、アスス暦では、7月であり、旧暦7月に一致します。だが、旧暦7月(太陽暦の8月)は、1と月間は少ない雨量ですが、次の旧暦8月(太陽暦の9月)には、多量の雨が降るようで、「水足らず」にはならないようです。むしろ、旧暦の10月(太陽暦11月)～旧暦の2月(太陽暦3月)までの冬の降水量が少ないことから、旧暦の5～6月(太陽暦4～5月)の稲作時の水量が不足するため、「河内狭山は 水足らず……池 掘らん」との記述になっているようです。この地区には大きな河川が少ないことから推測されます。

そこで、前述の「長暦(暦)→短暦の変換表」より、短暦の暦日に変換しますと、アスス暦682(偶数)年7月の「河内狭山は 水足らず……池 掘らん」の記述は、本来、短暦の10月の雨が少ない時期のことを指していたこととなります。このように、(現)アスス暦は、一見問題ないように思われますが、長暦(暦)であったことが証明され、また、(本来)のアスス暦は、短暦であったことが証明されたようです。

大阪狭山市を含む大阪府の降水量

単位:mm、(省略:閏月は未反映)

旧暦の月	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	平均
(太陽暦)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
降水量	43	58	99	121	139	201	155	99	174	109	66	37	108

④人の火ならず 知らぬ火の (景行天皇、九州巡幸)

「人の火ならず 知らぬ火の」内容は、景行天皇が八代海を航行する時に、今で云う「不知火」が見えたとの記述です。アスス暦では、アスス806年、景行天皇の御世18年のサ(5)月の初日の記述になります。更に、八代海の「不知火」について、調べますと現在でも自然現象として発生していると云うことです。(不知火のHPで確認済) その「不知火」は、旧暦の8月1日(太陽暦2014年8月25日、2015年9月13日、)頃の夜に「不知火」が見えるとのことです。

そうしますと、「不知火」の発生する月が、アスス暦と現在の月では、5月初日と旧暦の8月1日(太陽暦、8月25日、9月13日)で違うこととなります。だが、自然発生する「不知火」の発生月に2つもある筈がなく、アスス暦の5月の記述がおかしいと思われます。そこで、前述の「長暦(暦)→短暦の変換表」より、短暦の暦日に変換しますと、アスス806(偶数)年5月は、短暦では 9月1日(注一)のこととなります。このことより、(現)アスス暦は、長暦(暦)であったことが証明され、また、(本来)のアスス暦は、短暦であったことが証明されたようです。

④関連、マエ山の アワ岬見て (景行天皇、九州巡幸)

更に、アスス806年、景行天皇の18年の巡幸の話が続けますと、「不知火」を5月初日に見て、7月4日にタカタ宮、そのあと八女を越えて、「マエ山の アワ岬見て」、8月には福岡県のイクバ村に到達されたとの記述です。その間の7月4日～8月のことです。景行天皇は、八

女を越えて、長崎県島原半島にある「マエ山(眉山)の アワ岬(大三東)見て」を、約50～60 Km向こうに見られたとの記述です。九州の有明海沿いの現太陽暦の7月4日～8月は山には雲が湧き、遠方の島、山が見られるチャンスは少ないのですが、景行天皇は、一度の巡幸で幸運にも見られたとの記述です。この景行天皇の巡幸の7月4日～8月を短暦に変換して見ますと、天高く、空気も澄み切った秋・初冬の10月2日～31日頃に相当します。

私は、この20年間、九州に関するホツマツタエ伝説を捜しておりますが、2014年9月4日のこの日も、HPで探索しておりました。すると、福岡県八女市のあるHPに、「晴れた日には遠く有明海や島原半島も望むことができる」との掲載を目にしました。そこで、直接に八女市のHPの方に電話で確認しました。すると、「秋の晴れた日は、遠くにぼんやりと見える」とのことでした。この結果からも、景行天皇の巡幸時の季節は秋～初冬の頃であったと思われる、また、景行天皇の巡幸時に使用されていた暦は、(現)アスス暦であり、長暦(暦)であったことが証明され、また、(本来)のアスス暦は、短暦であったことが証明されたようです。(蛇足ですが、私は島原市の出身者になります。)

④関連、日本書紀の「不知火」の記述

「不知火」については、日本書紀にも記述されており、記述の月は、ホツマツタエとの記述と同じ5月になっておりました。このことから、日本書紀暦も長暦(暦)であったようです。

(日本書紀の記述の抜粋)

《景行天皇十八年(戊子八八)五月壬辰朔》五月壬辰朔。從葦北発船到火国。於是日没也。夜冥不知著岸。遥視火光。天皇詔挾抄者曰。直指火処。因指火往之。即得著岸。天皇問其火光之处曰。何謂邑也。国人対曰。是八代県豊村。亦尋其火。是誰人之火也。然不得主。茲知非人火。故名其国曰火国。(引用HP:朝日新聞インターネット「日本書紀」項)

⑤ミュキ(深雪)降り

2014_11_28_深雪降追加

全ホツマツタエの文中において自然現象に関し月日が明確な項目は、3件とっております。だが、日本書紀では、「夏に雪が降った」との記述があると聞いていたため、そう云えば、ホツマツタエにも景行天皇41年の条に「雪が降る」との記述があったのを忘れておりました。

(記述の抜粋) 39アヤ(紋)84

(天鈴829年)ム(陸)月末八(28)日 ミュキ(深雪)降り 君、櫓に召し 行き至る

この天鈴829年ム(陸)月末八(28)日を、短暦に変換しますと、冬の1月15日になり、「ミュキ(深雪)降り」の時期とも一致します。このように4件目からも、(現)アスス暦の故意の記述は否定され、(本来)の暦は、短暦の古代太陽暦であったことが立証されるようです。

① 七草ミソも、七草の

「七草」の記述は2件ありました。それぞれを短暦の月に変換しますと、「58年サナト 初日サヤエ」の記述は、月の記述がありません。そのため、七草より(仮)に1月と仮定し、短暦で計算します。すると、アスス暦の記述と違い短暦では、7月になります。もう一方の「四十六穂の春」を834年になります。たが、月日が未記載です。そのため、七草より(仮)に58年、または834年の1月と推定し、短暦で計算しますと7月になります。7月では「七草」の言葉は不適切のようです。また、833年と仮定しますと1月に計算されます。混乱の原因は、「七草」の記述に対し月、日が未記載であることにその原因があるようです。(未記述月日の不採用:8月の初日もあり特定不可)

(58 年)年サナト 初日サヤエに	古事記し 奉る。七草ミソも・・行われ	○	○
(833、834 年?)四十六穂の春	七草の	○	○

① `八月初日に 生る初穂

2014_12_18 八月初日生る初穂追加

前述の七草の項で取り上げました、「58年サナト 初日サヤエ」の記述と同じ、「初日」に関連する内容です。前述では、(未記述月日の不採用:8月の初日もあり特定不可)と記載しましたが、8月の初日をホツマツタエに遡って読んで見ますと、15アヤ(紋)19~24に記述されております。その原文訳は、スス暦の御世の「ウケモチ(保食神)が 八月初日に 生る初穂 トヨクンヌ(豊国主尊)に 奉る」との記述です。また、スス暦の何年であつたかは不明ですが、八月初日の記述は貴重な存在です。

15アヤ(紋)19~24

	クニコタチノ		クニコタチ(国常立)の
アメマツリ	ミケハコノミカ	天祭る	御食は木の実か
クニサツチ	ウムウケモチノ	クニサツチ	生むウケモチ(保食)の
ヤヨノマコ	イマノカダナリ	八代の孫	今のカダ(加太)なり
ウケモチガ	ハヅキハツヒニ	ウケモチが	八月初日に
ナルハツホ	トヨクンヌシニ	生る初穂	トヨクンヌ(豊国主尊)に
タテマツル	キミハカシキノ	奉る	君は赤白黄の
ユフニキテ	アメナカヌシノ	木綿和弊	天中節の
カミマツル	ゾロノホヅミノ	神祭る	ゾロ(稲)の穂積の
ミケモマタ	ウスツキシラゲ	御食また	臼搗き白げ
ハツヒニハ	カユトシルトゾ	初日には	粥と汁ぞ

なぜ、「八月初日に 生る初穂」に拘るかと云いますと、この八月初日をアスス暦と同じ月日と見なしたとします。そこで、「八月初日」を2倍化された(現)アスス暦→1倍化に変換した(短暦)のアスス暦に変換しますと、(現)アスス暦の奇数年では、短暦では4月16日になり、

偶数年では、短暦の10月16日になります。そこで、短暦の10月16日(注一参照)だけに焦点を当てますと、新嘗祭(現在は11月23日)の月日に近い日が求められます。

このようにホツマツタエの暦の詳細がわかってきますと、現在の新嘗祭(現在は11月23日)と云う儀式の原点は、15アヤ(紋)19~24の「ウケモチ(保食神)が 八月初日に 生る初穂トヨクヌ(豊国主尊)に 奉る」に源流があったのでは? と思われます。

② ゴロ実り

「ゴロ実り」の記述は1件のみですが、短暦の月に変換しますと、「627年メ(10)月初日」の記述は短暦の5月になります。「ゴロ実り」を秋の実りの収穫と仮定しますと、短暦の8~9月の時期に一致しないようです。また、「628年メ(10)月初日」と仮定しますと、「11月」になります。もう少し、研究が必要なようです。

(627、628 年?)メ(10)月初日に	ゴロ実り	○	○
-----------------------	------	---	---

V、まとめ

(仮)27鈴頃~のスス暦は、2倍化暦で誤植になっていた古代太陽暦であった。その史料を基に、(景行天皇以降に)長暦(暦)の太陰太陽暦の(現)アスス暦が編纂されていた。!! とのテーマを掲げて、原稿を書き始めましたが、今回の調査結果からも、(現)アスス暦の(本来)の暦は、短暦の古代太陽暦であったことが、益々、濃厚になって来たようです。

自然現象4件と短暦(1倍化暦)の再現性(まとめ)

今回の自然現象の記述は、垂仁天皇~景行天皇間に記述されていた4件でした。その4件の発生月をホツマの記述月より、2倍化暦(長暦)→1倍化暦(短暦)に変換し計算し直しますと、ホツマの記述月より計算月の方が、自然の発生月に近く、ほぼ再現するようです。

【再現事例】

ホツマの記述	ホツマ	評	計算	評	大阪府
③ 河内狭山は 水足らず	記述月		短暦の月		雨少ない月
(大阪狭山市)	682年7月初	<	10月1日	≒	新11月~3月
狭山は溜め池が多い					

ホツマの記述	ホツマ	評	計算	評	八代海
④ 知らぬ火の 国と	記述月		短暦の月		不知火発生
(熊本県八代海)	806年5月初日	<	9月1日	≒	旧8月朔
景行天皇の巡幸記より					2014年 新8月25日
					2015年 新9月13日

ホツマの記述	ホツマ	評	計算	評	島原半島
④ マエ山 アワ岬見て	記述月		短暦の月		良く見る季節
(福岡県八女市より)	7月4日～8月	<	10月2日～31日	≒	秋～冬朝
八女～有明海～島原半島間は、約50～60 km の距離になります。					

ホツマの記述	ホツマ	評	計算	評	奈良市
⑤ ミユキ(深雪)降り	記述月		短暦の月		日代宮
景行天皇の御世41年	陸月28日	≒	1月15日	=	冬

スス暦の御世 (注九) スス暦を(現)アスス暦の月日と見なして計算した場合

ホツマの記述	ホツマ	評	計算	評	宮中の儀式
① 八月初日に生る初穂	記述月		短暦の月		新嘗祭
ウケモチが豊国主尊に 奉る(新嘗祭の原流か)	8月初日	> <	4月16日 10月16日	× ≒	勤労感謝の日 新11月23日

重複しますが、大阪狭山市の「水足らず」の時期の違い、また、八代海の「不知火」など、自然現象として、毎年、決まった頃に出現するのに対し、ホツマツタエの記述には、自然現象の出現時期が違う記述がされているようです。このように、人間の力が及ばない自然現象から見ても、(現)アスス暦の故意の記述は否定され、(本来)の暦は、短暦の古代太陽暦であったことが立証されるようです。なお、七草、ゾロ実リに関してはアスス暦の年代の研究が必要なようです。

(以上)